

北九州市立中央図書館蔵の角筆文献

——近世から明治初期にかけての豊前筑前境界域の口頭語の特徴を探る——

柚木靖史

はじめに

二〇一三年から二〇一四年にかけて行った、北九州市立中央図書館蔵（以下、中央図書館と記す）の漢籍の悉皆調査によって、七十五点、冊数にして二七九冊の角筆文献が見出された。墨の書き入れから、これらの資料が、もと豊前と筑前の境界域（①）、現在でいえば、北九州市に位置する地域に在ったことは明らかであり、角筆を書き入れた人物も、その地域に住した人物であったと推定できるのである。また、書き入れた時代も、角筆の書体や、墨書との関係から、ある程度、推定することが可能な資料も多い。

本稿では、これらの資料の角筆による言語情報から伺える言語的特徴について、特に音韻の面から検討することとしたい。

一 中央図書館所蔵の角筆文献の刊行年代と特徴

さて、まず、中央図書館の角筆文献が刷られた年代について、記しておきたい。

刷られた年代を、江戸時代前期。中期、後期、明治時代に分けて示すと次のようになる。（②）

〔江戸時代前期〕十四点（慶安1、承応1、寛文4、延宝2、貞享2、元禄1、年代未詳3）

〔江戸時代中期〕七点（享保2、延享1、宝暦1、安永1、年代未詳2）

〔江戸時代後期〕三十点（天明1、寛政2、文化3、文政2、天保3、安政2、元治1、年代未詳16）

〔明治初期〕二十四点（年号の下に示した数字は、角筆文献の点数を示す。）

このように、板本の刊行年代としては、江戸時代初期から明治まで、幅広い。ただし、このうち江戸時代後期と明治初期との間に刊行された文献が、全体の七割以上を占める。

次に、印や墨書から分かる、中央図書館の角筆文献の特徴を記す。

まず、寄贈者として、「久野梅次寄贈」の朱印のある文献が、十一點（文献番号1、7、10、12、15、21、25、35、45、48、58）認められる。これらの文献には、決まって「菊池」印、あるいは「菊池姓」の墨書が存する。菊池氏と久野氏との関係は定かではないが、久野家は、かつて菊池氏所有の板本を多数所有し、それを久野梅次氏が、中央図書館の前身である小倉市立記念図書館に寄贈したものであると思われる。また、久野梅次氏が寄贈した角筆文献は、角筆の書き入れが、字形、凹みの深さ、文字の大きさから判じて、同一人物の手によるものである。ただし、角筆を書き入れた

人物が誰であるのかということについては、特定できない。これらの文献には、菊池姓という墨書が書き入れられたものもある。その菊池という墨書と、本文中に書き入れられた墨書は、同一人物によると判ぜられる。ただし、角筆の書き入れは、墨書とは字形が異なることから、墨書とは別の人物によって書き入れられたことになる。明治十九年板の文献12（「久野梅次殿寄贈」印あり）に、「菊池」朱印があり、あわせて「菊池姓」の墨書も存することから、久野氏から寄贈された文献に角筆が書き入れられた時期は、明治十九年以後であると考えられる。

次に、安廣寶六氏より寄贈された漢籍にも、多くの角筆文献が見出された。文献番号3には、「第八十二号式 故紫水安廣亥三郎氏 遺蔵図書 百三十四部 安廣寶六氏寄贈 昭和四年七月十五日 小倉市立記念図書館」の朱印がある。これによれば、紫水安廣亥三郎氏の遺蔵本を、安廣寶六氏が昭和四年に「小倉市立記念図書館」に寄贈したことが分かる。安廣亥三郎氏は、紫水という名で小倉に住んでいた書家である。父も、紫川と号した書家であった。紫川と号した安廣一郎氏については、『北九州市史』（近代・現代 教育・文化）の「明治期の書家および能筆家」に「通称一郎。元満鉄総裁安廣伴一郎の父。貫名海屋らに学ぶ。明治三十四年没。七十二歳。」（六四二頁）とある。(3)伴一郎と亥三郎とは兄弟で、寶六は、伴一郎の子息である。さて、これらの文献に角筆が書き入れられた時期は、「安廣寶六氏」の寄贈本の文献59が、明治十三年の刊行であることから、それ以後ということになる。角筆の書き入れは、遅くとも明治中期に終息していくことから推して、恐らくは、刊行されて間もないころに、角筆が書き入れられたのであろう。これらの文献に書き入れられた角筆の書体もまた、形、大きさ、角筆の凹みの深さ、線の太さから、同一であると判断できる。書き入れた人物については、厳密には特定できないが、安廣亥三郎氏遺蔵図書とあるから、紫水が書き入れたか、その父の書家、紫川が書き入れた可能性が大きい。なお、紫川やその子息の安廣亥三郎は、森鷗外「小倉日記」にその名がみえる。亥三郎は、明治三十二年から明治三十五年にかけての、森鷗外の小倉赴任時期に鷗外と交友のあった人物である。亥三郎の父、一郎は、森鷗外が小倉に赴任していた明治三十四年に亡くなっている。角筆文献の刊行された明治十三年に、亥三郎の父一郎は、五十一歳であった。その子、亥三郎は、小倉に在住し、三十代の壮年だったであろう。もちろん、亥三郎が明治十三年刊の文献59を手に入れたとき、その文献に角筆が既に書き入れられていた可能性もあるのであるが、亥三郎が有していた、刊行年の異なる複数の文献に同一人物の角筆の書き入れが認められることから、亥三郎が、同一人物による角筆の書き入れのある文献を偶然入手したとは考えにくい。やはり、亥三郎が文献を入手した後に、角筆は書き入れられた可能性が高いと考えられる。このように考えれば、「故紫水安廣亥三郎氏遺蔵図書」印のある複数の文献に、角筆を書き入れたのは、亥三郎か、それに近い家族であったのではないかと推察されるのである。

九日。(略) 今伴一郎の弟なる葉種商伊三郎の家に居る。家は小倉京町四丁目に在りと。

四日。(略) 此夜月に乗じて漫步し、京町を過ぎて安廣紫川の寿碑を観る。(略) 紫川は伴五郎の父、その寿碑を書するものは山縣元帥なり。

三日。朝霞。安廣亥三郎葡萄酒二瓶を贈る。予これが銘を撰べるを以ての故なり。亥三郎は京町の薬剤師にして読書人なり。父は所謂紫川先生、政治家伴一郎は其兄なりと云ふ。(略)

以上の他、寄贈者が分かる文献としては文献2で、「寄贈 昭和二十三年 偕行社」とある。偕行社は、帝国陸軍の将校准士官の親睦・互助學術研究のために日本全国に設立された建物で、森鷗外の「小倉日記」にも、その名がしばしば登場する。

二十七日。午前偕行社に往きて、始て福岡研究会に蒞む。(略)

十四日。少将山内長人を偕行社に宴す。

九日。(略)柴田を偕行社に饗す。

十二日。井上中将以下の将校予をしてクラウゼキッツ Clausewitz の戦論を偕行社に講ぜしむ。

小倉偕行社は、次に示すように、今の小倉城庭園のあたりにあつたと見られる。

小倉旧城内偕行社前なる戦後記念碑前の園地は紫川に臨み土地高燥にして風光佳絶、小倉の一勝地なるが(略)
(門司新報 明治三十二年六月二十一日 主筆 二階堂行文)

また、文献番号9に、「福岡県立小倉高等学校 元校長河合正武様寄贈」朱印がある。河合正武氏は、福岡県立小倉高等学校の5代校長で、昭和二十四年に就任し、昭和四〇年に退職している。文献番号23には、「寄贈 昭和十四年十二月九日 市内足原 池田光太郎氏」の朱印がある。足原とは、北九州市小倉北区内にある地名である。ただし、池田光太郎氏については、未詳である。文献番号29には、「森鐵藏氏寄贈」とある。画家として著名な森鐵藏氏であろうか。画家の森鐵藏は、八女郡忠見村に生まれ、大正九年小倉師範学校を卒業後、八幡高等学校に勤務する。昭和十年に若松尋常小学校に転勤となり、昭和十八年、若松の城水鉄工所青年学校の主事となる。画家であり、昭和五十四年四月、八十一歳で亡くなっている。(4)文献番号29には、「若松市立図書館蔵書」の朱印が押されている。文献番号26、36、40、41、50は、伊藤義路氏による寄贈本である。文献50に、「伊藤蔵書」「明治十九年三月一日北筑那珂郡 宜春村舎」とあることから、伊藤義路氏が筑前国那珂郡に住んでいたことが分かる。文献番号31および70には、「魚住信房様寄贈」の朱印がある。魚住信房氏についても、未詳である。

また、文献番号43には、「寄贈 昭和十年十月十三日 田川郡採銅所 酒井利彦氏」の朱印がある。酒井利彦氏についても、未詳である。文献番号49は、「本田土郎氏寄贈」とあり、寄贈者名が分かる。ただし、この本田土郎氏についても、未詳である。個人名ではないが、文献番号54には、「寄贈 大正十一年十一月二十五日 福岡県教育会 小倉教育支舎」とある。文献番号57には、「野田孝殿寄贈」の墨印がある。野田孝氏についても、未詳である。文献番号59には、「第 号故剛軒二階堂行文氏遺蔵図書／二階堂行健氏寄贈 大正十一年十一月一日 小倉市立記念図書館」とある。二階堂行文は、門司新報の主筆を勤めた人物で、森鷗外の「小倉日記」に次のようにある。

二十九日。二階堂行文の爲めに小倉安国寺古家の記を草す。

二十日。(略)二階堂行文文字石硯を贈る。(略)

二十一日。(略)午後二時奥平の葬を送る。六時送別会に三木亭に赴く。發起人六人。□杉山貞、□二階堂行文、□戸上駒之助、□柴田董之、□麻生作男、□椋梨義暲。(略)

文献番号74には、「寄贈 昭和26年6月9日門司市 香坂ユミ代」の朱印があるが、香坂ユミ代氏についても、朱印に記されたように門司市に住まれた人物という情報の他は、未詳である。

その他の印としては、文献番号4、5、6、16、20、30に、「門司商工学校自彊會印」が見られる。門司商工学校は、『門司市史』(5)によれば、明治39年に設置された門司商業補習学校を、昭和6年3月に門司商工学校と改称したとされる。なお、「門司商工学校自彊會印」が押された角筆文献に

は、「吉田貞次郎」「吉田正次」「吉田喜三郎」の墨書があるが、これらの人物については未詳である。文献番号14には、「思永館」の朱印がある。思永館は、小倉藩の藩校である。文献番号22には、「寄贈 大正十一年十一月二十五日 福岡県教育舎 小倉教育文舎」の印がある。文献番号34には、「門司市門司国民学校」「門司高等小学校之印」印がある。文献番号40には、「明倫館蔵」印がある。明倫館は、長州藩の藩校である。文献番号46には、「八幡市立図書館之印」印がある。文献番号55、56、71には、それぞれ「鹿門林氏書庫」印がある。北九州市立八幡図書館にも「鹿門林氏書庫」印の文献があるようで、同図書館のホームページによれば、『遠賀郡誌』や『福岡県地理全誌』の編纂にも携わった林次敏氏の蔵書」とされる。文献番号61の「ハ英 書林 森江英二」印は、東京本郷の森江英二書店の所蔵であったことを示す。なお、文献番号24の印「福本道勝」、文献番号32と33の印「越智氏蔵書」、文献番号44、68、75の印「赤松貫一郎蔵書之印」、文献番号53の印「中原蔵書」、文献番号67の印「末松保幸 文庫」については全て未詳である。

このように、中央図書館の角筆文献は、様々な人物から寄贈された文献群である。ただ、その由来を、印や墨書で確かめると、明治期には北九州の地に在ったことが確認できる。なお、由来のはっきりしない文献も確かに存するが、それらの文献の扱いを慎重にすれば、これらの文献が、江戸時代後期から明治時代初期にかけての豊前と筑前境界域の方言を知るうえで有効な資料となりうるのである。

また、墨書も散見される。人物名が複数記されるが、現段階では未詳である。

惜しむらくは、角筆の書き入れについて、誰がどこで書き入れたかという詳細がはつきりしないのであるが、詳細には特定できないまでも、江戸時代後期から明治初期にかけて、豊前と筑前境界域で書き入れられたと見てよい。

以下に、今回の調査で見つかった角筆文献の一覧を示す。

- (1) 正文易経 一冊
江戸時代中期板 袋綴装 青表紙 縦26・5横18・5 「菊池」朱印あり
- (2) 新刻校正易経 道春点 乾坤 二冊
江戸時代後期版板 袋綴装 青表紙 縦25・5横18・8
- (3) 校正音注 易経 再刻後藤点 乾坤 二冊
江戸時代天保頃板 茶表紙 縦25・5横18・0
- (4) 校定音訓 易経 上下 二冊
江戸時代文化頃板(文化十年序あり) 袋綴装 青表紙 縦25・5横18・0
- (5) 校定音訓 書経 改点 上下 二冊
江戸時代後期板 袋綴装 茶表紙 縦25・5横18・0 「門司商工学校自彊會印」朱印あり
- (6) 校定音訓 詩経 上下 二冊
江戸時代後期板 袋綴装 茶表紙 縦25・5横18・0
- (7) 改訂音訓 詩経 明倫館定点 二冊
江戸時代後期版板 袋綴装 茶表紙 縦25・5横18・0 「菊池」朱印あり
- (8) 毛詩 一冊

- (9) 江戸時代後期板 袋綴装 縦26・3横18・0
礼記 四冊
- (10) 江戸時代宝暦十三年(一七六三)板 袋綴装 縦25・5横18・5 青表紙 「福岡県立小倉高等学校 元校長河合正武様寄贈」朱印あり
礼記 上下 二冊
- (11) 江戸時代後期板 袋綴装 縦25・5横18・5 緑表紙 「菊池」朱印あり「久野梅次殿寄贈」印あり
礼記 白文 乾坤 二冊
- (12) 江戸時代安永八年(一七七九)板 袋綴装 縦26・0横18・5 薄茶表紙 「第六十四号巻 故紫水安廣亥三郎氏 遺於図書百三十四部 安廣六氏守贈 昭和四年七月十五日 小倉市立記念図書館」朱印あり
- (13) 改訂音訓 礼記 明倫館定点 四冊
明治十九年(一八八六)板 袋綴装 縦26・0横18・2 茶表紙 「菊池」朱印あり「久野梅次殿寄贈」印あり
- (14) 春秋左氏伝校本 十五冊
明治十四(一八八一)年板 袋綴装 縦26・0横19・0 黄表紙
- (15) 左氏伝 二十九 三十 一冊
江戸時代前期板 袋綴装 縦26・7横17・5 「思永館」朱印あり
- (16) 改訂音訓 春秋 明倫館定点 一冊
明治板 袋綴装 縦25・7横18・2 茶表紙 「菊池」朱印あり「久野梅次殿寄贈」印あり
- (17) 校定音訓 春秋 一冊
江戸時代後期板 袋綴装 茶表紙 縦25・5横18・5 「門司商工学校自彊會印」朱印あり
- (18) 孝経大義 一冊
江戸時代貞享元年(一六八四)板 袋綴装 茶表紙 縦27・0横19・0
- (19) 御註孝経 全 一冊
江戸時代寛政十二年(一八〇〇)版 袋綴装 縦27・0横19・0 外題ナシ(題簽剥落) 「第五十四号 故紫水安廣亥三郎氏 遺蔵図書 百三十四部 安廣六氏寄贈 昭和四年七月十五日 小倉市立記念図書館」印あり
- (20) 中庸章句 一冊
江戸時代前期板 袋綴装 縦26・0横18・5
- (21) 中庸 再刻後藤点 全 一冊
明治板 袋綴装 縦25・0横17・5 題簽破損 茶表紙 「蔵本道勝」印あり 「門司商工学校自彊會印」あり
- (22) 新刻校正 中庸 全 一冊
明治板 袋綴装 茶表紙 縦25・5横17・5 「久野梅次殿寄贈」印あり「菊池」朱印あり
- (23) 新刻校正 中庸 全 一冊
明治板 袋綴装 縦25・5横17・5 「小倉市立記念図書館」朱印あり 「寄贈 大正十一年十一月二十五日 福岡県教育舎 小倉教育文舎」

朱印あり

- (23) 新刻改正 論語 再刻後藤点 四冊
 明治板 袋綴装 縦25・5横17・5 「寄贈 昭和十四年十二月九日 市内足原 池田光太郎氏」印あり
- (24) 新刻改正 論語 再刻後藤点 三冊
 明治板 袋綴装 茶表紙 縦24・5横17・8 「門司商工学校自彊会印」あり 「福本道勝」印あり
- (25) 新刻校正 論語 二冊
 江戸時代後期板 袋綴装 茶表紙 縦25・5横17・5 墨書あり 「久野梅次殿寄贈」印あり 「菊池」朱印あり
- (26) 明治新刻 論語 後藤点 四冊k
 明治板 袋綴装 茶表紙 縦24・3横17・8 「明治二三年 伊藤義路氏」印あり 「高橋」朱印あり
- (27) 文化再刻 孟子 道春点 三冊
 江戸時代文化九年(一八二二)板 袋綴装 青表紙 縦25・5横17・8
- (28) 論語 一冊
 江戸時代中期板 袋綴装 青表紙 縦9・2横6・5
- (29) 新刻校正 孟子 後藤点 二冊
 江戸時代後期板 袋綴装 茶表紙 縦25・7横17・5 「森鉄蔵氏寄贈」印あり 「若松市立図書館蔵書」朱印あり
- (30) 新刻改正 孟子 再刻後藤点 四冊
 江戸時代安政五年(一八五八)板 袋綴装 茶表紙 縦25・0横7・5 「門司商工学校自彊會印」印あり
- (31) 孟子 一冊
 江戸時代延宝二年(一六七四)板 袋綴装 青表紙 縦27・8横19・5 「魚住信房様寄贈」朱印あり
- (32) 天保校正孟子 道春点 一冊
 江戸時代天保三年(一八三二)板 袋綴装 青表紙 縦25・0横18・0 「越智氏蔵書」印あり
- (33) 孟子 三冊
 明治板 袋綴装 白表紙 縦29・8横19・8 「越智氏蔵書」印あり
- (34) 明治新刻 孟子 後藤点 四冊
 明治板 袋綴装 茶表紙 縦24・6横17・8 「門司市門司国民学校」印あり 「理倫 明治十五年六月 第二号門司高等小学校」印あり 「明治卅五年五月十日交付門司市役所」印あり 「門司高等小学校之印」印あり
- (35) 孟子 四冊
 江戸時代後期板 袋綴装 茶表紙 縦8・6横6・5 「菊池」印あり
- (36) 新版考正 史記評林 十八冊
 江戸時代寛文十二(一六七二)年版 袋綴装 青表紙 縦26・8横17・8 「寄贈 昭和23年 伊藤義路氏」印あり
- (37) 校正再校 史記評林 二十四冊

- (38) 江戸時代天明九(一七八九)年版 袋綴装 白表紙 縦26・0横18・5 「寄贈 昭和三年 二階堂剛健 氏」印あり
史記評林 一冊
- (39) 江戸時代後期版 袋綴装 緑表紙 縦25・8横18・5 緑表紙
歴史綱鑑補 二十四冊
- (40) 江戸時代寛文三年(一六六三)版 袋綴装 茶表紙 縦26・5横18・8
国語 校正 三冊
- (41) 江戸時代後期版 袋綴装 白表紙 縦26・8横17・8 「寄贈 伊藤義路氏」「明倫館蔵」朱印あり
元明略史 一冊
- (42) 明治八年(一八七五)版 袋綴装 青表紙 縦18・5横12・9 「寄贈 伊藤義路氏」朱印あり
箋註十八史略校本 近藤元粹註釈 七冊
- (43) 明治十三年(一八八〇)版 袋綴装 黄表紙 縦26・0横18・4
箋註十八史略校本 六冊
- (44) 明治十三年(一八八〇)版 袋綴装 黄表紙 縦25・8横18・5 「小倉市立記念図書館」「寄贈 昭和十年十月十三日 田川郡採銅所 酒井 利彦氏」印あり
標纂十八史略校本 八冊
- (45) 明治十二年(一八七九)版 袋綴装 黄表紙 縦22・5横15・5 「赤松貫一郎蔵書之印」朱印あり
標記増補 十八史略 七冊
- (46) 江戸時代元治板 袋綴装 青表紙 縦26・0横17・9 「久野梅次殿寄贈」朱印あり
小学句読 一冊
- (47) 江戸時代後期板 袋綴装 青表紙 縦25・5横18・0 「八幡市立図書館之印」朱印あり
文字訓点小学句読 内篇外篇 六冊
- (48) 江戸時代文政元年(一八一八)版 袋綴装 青表紙 縦25・5横18・0 「第百四号巻 故紫水安廣亥三郎氏遺蔵図書百三十四部 安廣寶 六氏寄贈 昭和四年七月十五日 小倉市立記念図書館」朱印あり
小学句読 内篇校正 外篇校正 四冊
- (49) 江戸時代寛政元年(一七八九)版 袋綴装 青表紙 縦25・5横18・0 「菊池」朱印あり 「久野梅次殿寄贈」墨印あり
改正小学句読 四冊
- (50) 明治十三年(一八八〇)版 袋綴装 茶表紙 縦25・5横15・0 「本田士郎氏寄贈」朱印あり
新刻改正小学 後藤点 四冊
- (51) 明治十六年(一八八三)版 袋綴装 茶表紙 縦22・0横13・5 「寄贈 昭和二十三年 伊藤義路氏」印あり 「伊藤」朱印あり
小学句読 三冊
- 江戸時代文政十二(一八二九)版 袋綴装 茶表紙 縦25×0横17・5

- (52) 荀子全書 十冊
江戸時代延享二(一七四五)年版 袋綴装 青表紙 縦27×0×横18・0
- (53) 校訂忠経集註 五十川左武郎 校訂増註 一冊
明治十五(一八八二)年版 袋綴装 黄表紙 縦16・2横18・2 「中原蔵書」朱印あり
- (54) 校訂女四書 四冊
江戸時代後期版 袋綴装 青表紙 縦26・0横17・8 「寄贈 大正十一年十一月二五日 福岡県教育会 小倉教育支舎」朱印あり
- (55) 七書 一冊
江戸時代初期版 袋綴装 茶表紙 縦27・5横18・5 「鹿門林氏書庫」朱印あり
- (56) 七書 一冊
江戸時代初期版 袋綴装 茶表紙 縦27・5横18・5 「鹿門林氏書庫」朱印あり
- (57) 重刻内閣秘伝字府 三冊
江戸時代寛文四年(一六六四)版 袋綴装 青表紙 縦27・5横18・5 墨書・朱書書き入れあり 「野田孝殿寄贈」墨印あり
- (58) 箋注蒙求 三冊
江戸時代天保三年(一八三二)版 袋綴装 青表紙 縦25・2横17・8 「久野梅次郎寄贈」墨印あり 「菊池」朱印あり
- (59) 箋注蒙求校本 反刻 三冊
明治十三年(一八八〇)版 袋綴装 紺表紙 縦25・4横17・8 「第四十六号巻 故紫水安廣亥三郎遺蔵図書百三十四部 安廣寶六氏寄贈 昭和四年七月十五日 小倉市立記念図書館」朱印あり
- (60) 標題徐状元補注蒙求 七冊
江戸時代承応三年(一六五四)版 袋綴装 白表紙 縦28・0横20・0 「寄贈 昭和三三年 月 日 伊藤義路氏」印あり
- (61) 華嚴経指帰 一冊
明治版 袋綴装 紺表紙 縦26・0横18・5 朱書あり 「ハ英 書林 森江英二」印あり
- (62) 重開僧史略 二冊
江戸時代慶安四年(一六五二)版 袋綴装 白表紙 縦27・5横19・5 朱書あり
- (63) 元版楞嚴会解 五冊
江戸時代後期版 袋綴装 白表紙 縦25・5横16・0 朱書あり
- (64) 評苑改正 文選旁訓大全 八冊
江戸時代元禄十三年(一七〇〇)版 袋綴装 茶表紙 縦27・0横18・5 墨書朱書あり
- (65) 羅山訓点 三体詩 三冊
江戸時代享保三年(一七一八)版 袋綴装 茶表紙 縦27・0横18・5 墨書・朱書あり 「明治三三年 伊藤義路氏」印あり
- (66) 重校正唐賢三体詩 三冊
江戸時代享保一〇年(一七二五)版 袋綴装 青表紙 縦27・2横18・5

墨書・朱書あり 「二階堂氏図書」印あり 「大 号故剛軒二階堂行文氏遺藏図書／二階堂行健氏寄贈 大正十一年十一月一日 小倉市立記念図書館」印あり

(67) 羅山訓点 三体詩 一冊

明治板 袋綴装 青表紙 縦27・3横19・3 墨書あり 「末松保幸 文庫」朱印あり

(68) 頼山陽 増評八大家文読本 十四冊

明治十二年(一八八一)板 袋綴装 紫表紙 縦22・5横14・8 墨書なし 「末松貫一郎蔵書之印」あり

(69) 安政新刻 古文真宝後集 二冊

江戸時代安政四年(一八五七)板 袋綴装 青表紙 縦26・0横18・0

(70) 魁本大字諸儒箋解古文真宝後集 上 一冊

江戸時代後期板 袋綴装 青表紙 縦25・5横18・5 墨書なし「魚住信房様寄贈」印あり

(71) 魁本大字諸儒箋解古文真宝後集 二冊

江戸時代寛文九年(一六六九)板 袋綴装 青表紙 縦27・5横18・0 墨書・朱書。白書あり 「鹿門林氏書庫」朱印あり

(72) 新板校正 古文真宝 上下 二冊

江戸時代文化二年(一八〇五)板 袋綴装 青表紙 縦25・5横18・0 墨書なし

(73) 新增評註古文真宝 三冊

江戸時代延宝八年(一六八〇)板 袋綴装 青表紙 縦27・0横19・5 墨書朱書あり

(74) 評本正文規範 頼山陽先生講義 牧百蜂先生筆記 一冊

明治二十七年(一八九六)板 袋綴装 朱表紙 縦22・0横15・0 墨書なし 「寄贈 昭和26年6月9日門司市 香坂ユミ代」 「小倉市立図書館」朱印あり

(75) 増補正文規範評林 三冊

明治板 袋綴装 黄表紙 縦26・5横18・8 朱書なし 「末松貫一郎蔵書之印」朱印あり

(以上、紙面の都合により、表紙や表紙見返し等の墨の書き入れや刊記等の記述を略す)

二 角筆の書き入れにみられる音韻事象

本節では、今回確認された角筆文献の角筆の書き入れに基づき、特に日本語の音韻的事象について、考察することとする。まず、母音交替例として、次の例が見られる。

(1) 母音交替

(ア) [a]と[o]の交替

△[a]が[o]に替わった例▽

- 1 「ヲ(フ)」(『逢』)(64 文選 卷六 23丁裏5行目)
- 2 「ヲフ」(『逢』)(65 三体詩 上 21丁表4行目)

右の例は、「逢」の訓である「アフ」を「ヲフ」にした例である。いずれも、文末の「逢」であり、文中で「テ」に続く連用形の音便ではない。

△[o]が[a]に替わった例▽

- 3 「トトノウ」(『斎』 墨書『ト、ノフ』)(5 書経 3丁表3行目上)
- 4 「カ(ヒ)」(『恋ヒ』)(64 文選 卷八 19丁裏10行目)

3は、「トトノウ」を「トトノウ」とした例である。4は、「コヒ」を「カヒ」のようにオ段音をア段音とした例である。

(イ) [a]と[e]の交替

- 5 「ヘイ」(『右倍』)(43 箋註十八史略 卷二 23丁表6行目 上欄外)

5の例は、「バイ」を「ベイ」とした例である。現在でも、九州の広域で、[a]と[e]の交替が見られる。

(ウ) [i]と[o]の交替

- 6 「ロ」(『黄・裏』)(10 礼記 29丁表6行目)

6は、「裏」の音は「リ」であるが、これを角筆では「ロ」としている。「黄」の韻尾の音[o:]にひかれてオ段にしたものか。

(エ) [o]と[u]の交替

- 7 「ブク」『墨』(55 七書 卷下 7丁表2行目)

7は、「墨」の音の「ボク」を「ブク」にした例である。

以上、母音交替について見てきたが、中国地方の角筆文献と比べて、特に異なる母音交替の傾向は見られない。

(2) 子音の交替

8 「コキ」(『簞・簞』)(17 孝経 45丁表2) ホキ

8は、子音hとkの交替例である。hは江戸時代後期には、現在の発音のような声門音に近くなっていたと考えられる。kは軟口蓋音である。調音点は、完全に一致するわけではないが、近いとはいえる。発声法はいずれも破裂音で、交替可能な子音である。なお、hとkの交替例も、中国地方の角筆文献に見られる。

(3) 開合の区別

開合については、以下に示すように、開合が守られている例がある一方で、開音を合音にした例や、合音を開音にした例も多くみられる。これらの状況を、開合の乱れによって表記が混乱しているとみるか、発音を反映して表記したとみるかについては、なお、検討の余地があるが、筆者は、口頭語を反映しやすい角筆の性質からして、発音を反映した表記であるうと考えている。先に挙げた母音交替例でも、[a]から[o]の交替に対して、逆に[o]から[a]への交替例が存する。開音が合音になる現象は、音韻史上の大きな流れであるが、明治になっても開音を残した地域もあり、開音と合音の交替は日本全国一様ではなかったとみられる。開合の発音については、[a]を[o]と発音する変化は大きな流れであったわけだが、地域によっては、逆に[o]を[a]と発音することもあったのではないかと考えるのである。

【合音を開音にした例】(ここでは全15例のうち2例を挙げる)

9 「リヤウ」(『陵』)(64 文選 3丁表4行目)

10 「ヒヤウ」(『場苗』)(64 文選 卷六 13丁裏7行目)

以上の例は、合音を開音にした例である。たとえば、9は、「リヨウ」という合音である「陵」の音を、「リヤウ」という開音にした例である。

【開音を合音にした例】(全21例のうち2例を挙げる)

11 「コウ」(『夾鍾』)(12 礼記 2丁裏7行目)、

12 「コウ」(『東膠』)(12 礼記 71丁表4行目)

以上の例は、開音を合音にした例である。たとえば、11は、「カウ」という開音である「夾」の音を、「コウ」という合音にした例である。

以上、用例を挙げたように、本来の開合を保った例と、本来の開合とは異なる例とが見られる。合音を開音にした例は、全て拗長音であるという共

通点がある。(ここに挙げていない例もすべて拗長音を開音にしている。)これに対して、開音を合音にした例には、拗長音の例はほとんど見られない。拗音は開音に発音されやすかったのであろうか。合音を開音にする現象は、今回の北九州の角筆のみだけでなく、中国地方の角筆にも多く見られる。

(4) 合拗音の直音表記

合拗音については、ほぼ保たれている状況である。合拗音を、もとのとおり合拗音で記した例が、7例存する。これに対して、合拗音を直音で記した例は、次の一例である。

13 「カ」(白『華』)(6 詩経 40丁表3行目)

13の例は、「華」の音「クワ」を「カ」とした例である。この例で、直音表記されている理由は定かではない。残念ながら、文献6の角筆の書き入れられた時代や場所は特定できない。

(5) 才段拗長音のイ段+ウ表記

才段拗長音を「イ段+ウ」で発音することについては、たとえば、日葡辞書に下の地方の言い方として記される。よって、豊前、筑前地方においても、中世末、才段拗長音を「イ段+ウ」で発音されていたことが知られるのである。近世から明治にかけても、このような発音がなされていたことが、次の例から分かる。

14 「スイビウ」(『衰病』)(66 三体詩 上36丁裏7行目)

14の例は、「スイビヨウ」を「スイビウ」とした例である。なお、才段拗長音のイ段+ウ表記については、小林(1992)(6)に詳細に説かれている。『日本言語地図』によれば、「今日」を「キュー」と発音するのは、福岡県を除く九州全般であるが、江戸後期から明治にかけては、なお、福岡県の現在の北九州地方でも、才段拗長音のイ段+ウと発音する現象が認められたのかもしれない。

(6) ウ段拗音「ジユ」の直音化

ウ段拗音の直音化の例が、一例見られる。

15 「ジンギ」(『準擬』)(66 三体詩 上55丁裏9行目)

15の例は、「ジユンギ」を「ジンギ」とした例である。ウ段拗音の直音化の例は、中国地方の角筆文献にも多くみられる事例である。

(7) 直音「シ」の拗音化

16 「シユンシヤク」(『斟酌』)(64 文選 6丁裏9行目)

16の例のように、「シ」を「シユ」と拗音にする例は、中国地方の角筆文献には、見られない例である。直音を拗音に発音する現象は、現在の九州方言に広くみられる。16の例は、現在の九州方言と合致する例である。ただし、一例のみであり、文献64も、その由来が未詳であることから、「シン」を「シユン」とした例が、豊前、筑前の方言を表す例と特定できるかどうか、なお、注意する必要がある。

(8) 短音の長音化

短音の長音化の例が、一例見られる。

17 「上ソウ」(『除趨』)(9 礼記 9表7行目)

17の例は、「ジヨソウ」を「上」の類音字を使って「ジヨウソウ」と記している。この短音の長音化の例は、中国地方の角筆文献に多く見られる事例である。

(9) 長音の短呼

長音の短呼の例は、次の例が認められる。(四例のうち二例を示す)

18 「ベンキヨ」(『勉強』『ベンキヨウ』朱書)(19 中庸 23丁表1)

19 「ホサン」(『褒讃』)(64 文選 2丁表3行目)

18の例は、「ベンキヨウ」を「ベンキヨ」と記している。ただし、本来は、「ベンキヤウ」と開音である。すべて才段長音の短呼例である。なお、このような、長音の短呼の例は、中国地方の角筆文献にも多く見られる事例である。

(10) 四つ仮名の乱れ

いわゆる「ジ」「ズ」と「チ」「ツ」の乱れた現象も見られる。

20 「上ソウ」(『除趨』)(9 礼記 9表7行目)

21 「マユツミ」(『黨』)(65 三体詩 中4丁裏6)

20は、「ヂヨソウ」を類音字「上」を使って「ジヨウソウ」と記した例である。これに対して、21は、「マユズミ」を「マユヅミ」にした例で、ザ行をダ行にした例である。四つ仮名の発音の混乱状態によって表記が乱れたものか、実際に「マユヅミ」と発音されたかは、定かではない。次のように、「ヅ」を「ズ」にした例もあるので、四つ仮名の発音に混乱が生じていることを背景に、表記が乱れているのかもしれない。

22 「ワズカニ」(『纒二』)(66 三体詩 上44丁表1行目)

なお、明治38年発行、国語調査委員会編の音韻調査報告書によれば、四つ仮名の質問に関して、福岡県の四つ仮名の状況は次のようである。

○第廿四条 ㄱ(ジ)とㄱ(ヂ)ト(各拗音ヲモ含ム)ノ区別アルカ。

●区別ナク何レモ「ジ」ト発音スルガ普通ナリ。(久留米市ヲ中心トシタル筑後地方、久留米市、御井郡、三瀨郡、浮羽郡、八女郡)ニアリテハ明ラカニ区別ス)

○第廿五条 「ジ」と「ヂ」トヲ区別スル地方ニ於テ、本来ノ「ジ」ヲ「ジ」ト発音スル例、又ハ本来ノ「ヂ」ヲ「ジ」ト発音スル例アルカ。

●稀ニ「フジサン」(富士山)ヲ「フヂサン」、「カウヂ」(小路)ヲ「カウジ」、「カウヂ」(麴)ヲ「カウジ」、「クヂラ」(鯨)ヲ「クジラ」トイフコトアレド概シテ「ジ」「ヂ」(各拗音ヲモ)ノ発音ヲ誤ルコトナシ。

○第廿七条 ㅈ(ズ)とㅈ(ヅ)トノ区別アルカ。

●旧久留米藩(第二十四条ノ地方ニ同ジ)ニアリテハ明ラカニ区別スレドモ他ノ地方ニアリテハスベテ「ズ」「ヅ」ノ区別ナシ。

○第廿八条 「ズ」と「ヅ」トヲ区別スル地方ニ於テ、本来ノ「ズ」ヲ「ヅ」ト発音スル例、又ハ本来ノ「ヅ」ヲ「ズ」ト発音スル例アルカ。

●稀ニ「ハズミ」(機)ヲ「ハヅミ」「ミヅ」(水)、「クヅ」(屑)、「ナマヅ」(鯨)ノ「ヅ」ヲ「ズ」ト発音スル例アレド概シテ「ズ」「ヅ」ノ発音ヲ誤ルコトナシ。

このように、明治38年には、福岡県において四つ仮名の発音は、久留米地方を除き、「ヂ」「ヅ」は、「ジ」「ズ」と発音されていたようである。中央図書館の角筆は、これより早く、明治時代初期には、四つ仮名の発音は、ほとんど区別されていなかったことを示しているようである。中

おわりに

以上、中央図書館の角筆文献を資料として、江戸時代後期から明治時代初期にかけての豊前と筑前の境界域の言語的特徴について述べてきた。問題点として、角筆の私的性という性質から、角筆による年紀等の詳細が無いため、角筆を書き入れた具体的人物、詳細な記入年代を厳密には明らかにし得ていない点が挙げられる。しかしながら、今回見出された多量の角筆文献を資料にして、その寄贈者、寄贈経緯、墨書や朱書の書き入れ、印等から、

中央図書館の角筆文献が、現在の北九州市の地にあつて、代々その地に受け継がれてきた資料であることは確かであろう。したがって、年代、記入者は特定できないまでも、角筆の書き入れから、豊前と筑前の境界域の江戸時代後期から明治初期にかけての言語的特徴のうち、特に音韻的な側面の概略は記述し得たかと思う。今後、北九州市域各所から、角筆の発見が期待されるので、それら資料の分析を俟って、本稿で認められたような、さまざまな事象についてより詳細に記述していきたい。

- (1) 現在の北九州市のうち、門司区、小倉北区、小倉南区、八幡東区の東部は豊前国に属し、八幡東区の西部、八幡西区、若松区、戸畑区は筑前国であった。江戸時代の藩では、豊前国は小倉藩の所領であり、筑前国は福岡藩の所領である。中央図書館の角筆文献は、門司や小倉を中心とした豊前の資料が多くを占めるが、八幡や若松、遠賀などの墨書もみえ、筑前の資料も若干含まれている。
- (2) 江戸時代を前期、中期、後期を三分する仕方については、江戸開府（慶長八年）から慶応四年を、年数を三等分する方法や、政治的変革によって分ける方法、世紀によって分ける方法など、さまざまものが存するが、ここでは、年数をほぼ三等分する方法によった。この分け方により、江戸時代前期を江戸開府の慶長八年から元禄まで、江戸中期を宝永から安永まで、江戸後期を天明から慶応までとした。
- (3) 『北九州市史』（北九州市史編さん委員会編一九八三年）による。
- (4) 注3に同じ。
- (5) 『門司市史』（門司市役所編一九三三年）による。
- (6) 小林芳規「方言国語史研究の方法と課題——方言史料として観た角筆文献」（『国語学』一七一号 一九九二年）

【付記】 本稿は、二〇一三年から二〇一四年にかけて北九州市立中央図書館にて行った、同図書館に所蔵されている江戸時代漢籍の全本調査に基づく角筆文献調査報告である。その間、轟良子氏をはじめ、多くの図書館職員の方々のお世話になった。記して御礼申し上げる次第である。特に、轟良子氏には、文献の閲覧、調査にあたり、多大なるご厚情を賜った。また、二階堂行文氏、偕行社のことなど、北九州市の歴史、文化に関わる多くのご教示をいただいた。心より深謝申し上げる次第である。